

近代の自然観の形成に関する考察

——山岳観念を中心に——

藤原 ゆり子

Concerning the Modern Concept of Nature in its Making

— In Reference to the Ideas of Mountains and Climbing —

FUJIWARA Yuriko

“Modern climbing” started in Western Europe. It represents how humans and nature were related in the early stages of Modern Europe. However, social and mental conditions on which modern mountaineering arose have not yet been examined fully. In this essay I will inquire into those conditions in order to make clear one aspect of modern concept of nature.

序

自然観は、今日の自然環境に関わる諸問題への姿勢を規定する根本であるに留まらず、人間が持つ外界や自身の存在根拠の認識、そしてそれらへの意味や価値の与え方をも示す、世界観の一環として捉えることができるであろう。歴史上、自然環境の姿も自然の定義も移り変わり、自然の意味を人間との最も高次の接点において解釈せんとする思想的試みも変遷してきたが、重要なのは、自然が意識上常に人工物や本来的でないものと対比される地点にあったことであり、その意味で自然は他のいかなる壮大・機能的な人工物より強く、遥かに遠く根源的な、事物と精神の混成物であったのだ。原始的な山岳信仰の時代から、近代の合理的思考及び宗教観の変化により自然から畏怖と迷信が取り払われるまでの間、自然が人間の精神層の深部に位置する心情と呼応し続けたことは、無明な前近代人の幼い精神構造にすぎなかったのだとは思わない。自然が神と——ひいては、我々が世界を信じ肯定するに足るような何らかの根拠と——等視される地位を失い、それに代わる絶対的な根拠が構築されなくなったことで、我々は神話なき世界に生きることとなり、全世界的な成立根拠と互いの有機的な連関性を精神において失うこととなったのである。このことはもはや、自然観という語の本来の範囲を超えた問題をすら提示していると言えるであろう。

しかし、この問題は、世界自体の根本的な空虚性を示していると考えよりも、むしろ近代において機能してきた思考原理や価値観の影響と見るこそ妥当であると考え。近代の自然観は、近代の社会・精神におけるいかなる要素から導き出され、いかなる思考を基盤に、どう機能したのか。また、その近代の特性の形成は、近代以前のいかなる底流から導かれたもの

であったのか。更には、近代の自然観の核心はどこにあるのか。ここでは、文明史論的に辿ることのできる具体面に注目し、題材として特に、自然に対する人間の行為が近代において顕著な変化を示した場である「山岳」を取り上げ、これらの問題を考察することとしたい。

1. 自然観の変遷

「自然 (nature)」の語源は、ラテン語の *natura* (誕生、構成、性格、事の成り行き) にあるとされる。その意味には、文明や人間とは区別される「野外」と、人間の意思や行為を含めた「すべての物質世界」の二つがあると見てよい。人間と区別されるものを総合的に指す前者の場合も、すべての世界を様態的に表現する後者の場合も、いずれも「自然」は、人間が認識しカテゴリー化したことで自然として捉えられるようになった意識上の事物であって、元来「自然」という固有物は存在しない。「自然」は、人間の認識によって顕現するものであり、自然の意味は、人間の意識やその意識を導き出した精神のありかた次第で変化するという前提を持っている。

古代ギリシアのアリストテレスやプラトン主義自然学では、自然に有機的なものを見て、自然を能産的なものとして認識していた。古代ギリシアでは、自然は、ロゴス——真理——に繋がり得る場所に置かれていたと言ってよいであろう。やがて、ギリシア哲学が異世界へブライの流れを汲むイエス・キリスト（という史実であり思想でもあるもの）と合流すると、自然の位置も変わり、古代ギリシア的解釈では始まりも終わりもないものであった自然（フュシス）に対し、世界には初めがありそれは創造主である神とその義・愛から発した意志が根源である、というキリスト教理的な世

界解釈が台頭する。そして、ロゴスは、神（の言葉）が受肉して降り立ったイエス・キリスト自身を指すことに転位していった。中世の教会を頂点とする封建社会においては、トマス・アキナスの有名な「恩寵は自然を破壊せず、却ってこれを完成する」との見解のように、至上の存在である神と自然が補完関係にあった。しかし近世以降、デカルトやニュートンが世界の新たな解釈を開示した後の機械論的自然観では、原因と結果という因果性による物理的・数学的認識に基づき、自然を実験操作の対象に転じ、人間の支配下におくようになっていった。

近代、この機械論的自然観と同様に近代社会原理から作用を受けたと思われるものは、感情・情操的次元での自然との接点から生じた自然観の存在であり、それは 18～19 世紀の欧州ロマン主義の流れを汲むものであることから、機械論的自然観とは別種の流れとして区分し、複数の自然観の並立状態として捉えることができる。この二つの自然観は、共に近代の啓蒙主義により人間が自らの人間性と自由に開眼したことを前提として形成されたものであるが、同じ源流を持ちながらも、流れの一方においては技術の進歩と結びついて自然が利用される実利的な機械論的自然観が作られ、他方では、人間的美質と自然の美・崇高が同等視されて、人間と自然が精神的価値という点において一体化したロマン主義的自然観が導き出された。近代には更に異なる自然観の見解として、ドイツ観念論期の自然哲学や、自然神学等の観点が存在している。この自然哲学は、デカルトやニュートンの機械論的自然観に対して古代ギリシアの有機体説を復権させようと意図した多分に思弁的なものであり、また、自然神学は神学的前提を基盤とするものであった。

思想として結晶したこうした自然観は、いずれも哲学的前提と時代的な必然性のもとに導き出され、各々の歴史的時点において世界と人間が正対しうる根拠を組み上げたものである。古代から考えられていたような超越的な力が自然にはないことが科学的解明により明らかになっても、なおも自然把握と共に世界の規範を想定し構築しようとしたことは、人間のある理知的な意識の存在を示すものである。

2. 西欧における山岳の概略

1) 近代以前

人間の、山岳に対する感情の原型は、畏怖に基づいて、一方では恐怖を、一方では神の創った世界の壮大さ・素晴らしさを感じる両面を持っていたと考えられる。高山は人間に恐れられ、神々の居場所と考えられ

ていた。これは未開民族にも先進文化民族にも共通し、人間と山岳との間の最も古い関係は常に宗教的なものであったという事実がある。

神話の時代を除き、山岳観が窺える最古の時期は古代ローマである。北に聳えるアルプスの壁は障害であり、不愉快なものと捉えられていた。いくつかの文書に、アルプスを形容する「身の毛のよだつ」、「恐るべき」、「嵐の吹きすさぶ」等の形容が見られる。

中世のキリスト教社会では、山岳の壮大さ・素晴らしさを讃美するような記録はなく、基本的には山への畏れの感情に支配された時代であった。巡礼など、信仰的な面からの関わりは深まったが、教会の教えに厳しく制約された地理学は、アルプス研究における進歩を遅々たるものにさせられていた。今日では常識となっているような自然科学的知識がなかったため、人々は自然の威力を理解し得ず、人々は高い山を不自然で得体の知れないものとして恐れる気持ちを深め、山は恐怖の対象としてしか表現されなかった。巨人のような魔人や妖怪という形で山岳の威力が擬人的に表現されたり、火炎地獄が山の中にあり、罪を清める死人の魂がアルプス最大の氷河であるアレッチ氷河に閉じ込められているとする非現実的な伝説が生まれたりした。

13～17 世紀になると、科学的な考え方が発生する。科学者・人文学者の活動により、山の世界の美、科学的に認識されるべき対象の多様さ、高山が人間の健康に及ぼす好影響等が知られるようになった。少数の芸術家や学者達と、一般の山岳旅行者等の持つ感覚との間にはまだ隔たりがあり、アルプスへの恐怖心は解消されていなかったものの、科学的な活動は、後の時代にアルピニズムによる山の征服を可能にするための前提条件を生むことになった。

1335 年、詩人フランチェスコ・ペトラルカによりモン・ヴァント（1960m）が登頂され、これがヨーロッパにおける登山の第一号とされる。また 1387 年には、Pont・ピラトの霊がスイス・ルツェルン近郊のピラト山西峰グネブシュタイン（1920m）の下の湖に住んでいるという民間信仰に基づき、6 人の僧侶が伝説の真相を極めようと、教会当局の禁止令を無視して登山し、下山後牢に入れられる。更に 1492 年、仏国のシャルル八世がローマ参詣の途上、グルノーブル南方にあるモン・テギーユの岩壁の鋭さにうたれ、家臣に登攀を命令。アントワヌ・ド・ヴィルと 10 人の従者がロープ・梯子を用い 3 日間で頂上を極め、頂上に邪神を慰める為の祠を建立した。また、16 世紀になると、1518 年にはスイス・ザンクトガレンの市長ヨアヒム・フォン・ワッツを含む 4 人の人文主義者がルツェルン市当

局の許可を得てピラトス山へ登り、1536年にはヨハン・ミュラーが植物研究のためにスイスのシュトックホルン（2190m）に登っており、1538年、スイスの歴史家・知事、エーギディウス・チューディが『ラエティア・アルプスについて』という地誌学的論文を発表、同地域の地図も印刷公表される。1555年には、スイスの人文学者コンラート・ゲスナーが、行政庁の特別許可を得てピラトス山に登る（一説には1518年）。肉体と知性と魂についての見解で尊敬を集めていた彼は、古くからの迷信を否定し、更に自然を眺めるだけでなく自ら身体を動かす健康的な生き方の一環として、山岳世界での体験記録を書いた。1574年には、スイスの人文学者トマス・ブラッターが語った内容を元に、ヨージアス・ジムラーが、アルプス世界を詳しく写実的に描いた『ワリスとアルプス』を刊行。このような先駆者の活動が、近代登山発生の土壌を少しずつ整えていったと考えられる。

しかしその後、17世紀前後には、宗教問題、戦争、農民一揆、ペスト等の災厄が荒れ狂い、政治的に不安定な状況下、登山思想は芽を出した状態でほぼ中断する。

2) 近代

近代の西欧の人間と山岳との関わりは、登山という形態をとって進行していった。また、その活動場所は、アルプスという地理上の一山域が中心となった。

アルプスは、欧州とアフリカのテクトニック・プレートの衝突によって形成された山脈であり、1000万年当たり2000m隆起して、標高4807mのモンブランを最高峰とする現在の高さを形成した。現在では、ジェノア湾の地中海岸に近いコルレ・ダルターレから、オーストリア東部のホッハシュバプまで、1000km以上にわたって延びる大山脈となっている。欧州の大河の多く——ローヌ川とその左岸の支流、ライン川、ダニユール川上流の右岸支流、ドナウ川、ポー川とその左岸のすべての支流——がこの山脈を水源としていること、また、5つの基本的な分水嶺——地中海・アドリア海、アドリア海・北海、アドリア海・黒海、北海・地中海、黒海・北海——であることにより、欧州で最も重要な山脈となっている。稜線には、それを辿って多くの国の国境線が引かれ、また、国際的な数々の峠が横切っており、欧州において多くの有形・無形の意味に結び付けられる存在となっている。

近代登山の大きな時代背景としては、1760年代（木綿工場で作業機械が使われ始めた）～1830年代（工場制度がほぼ揃った）の、英国産業革命がある。科学革命以来の合理主義の発展も、これに大きな貢献をした。

産業革命後、産業資本家と賃金労働者の2大階級からなる資本主義社会が確立され、交通革命（鉄道や船舶の運輸、流通手段、通信網等の整備）も起こる。尚仏国では1830年代、独国では1850年代、日本では明治維新後産業革命を迎える。またフランス革命以後は、価値観が変動し、十八世紀的啓蒙の合理主義に代わってロマンティシズムの思潮が支配的になり、西欧の情熱的詩人等により自然美や高峰の美が称えられたときでもあった。

近代の山岳活動は、まず学者・文学者の知性が、山岳や山の生活に人間の純粋な感情や高次の精神活動と結びつくものを見出し、当時の社会の問題点と対比して提唱し得たからこそ、人間の深く強い動機を山へと喚起し可能となったものである。

1723年、チューリヒの医師・数学教授ヨハン・ヤーコプ・ショイヒツァーが、自然科学者としての調査登山を記した『スイス・アルプス地域の旅』を出版し、欧州の知識人の間に反響を呼ぶ。科学的記述と並び、「実りあることを成そうと思う人は、暖炉の前に座り続けて気まぐれな空想を暖めていないで、自然そのものを見つめ、山や谷を駆け巡るべきである……山の上で人間は神の力と恩寵と知恵とを授かるのであるから」というような純粋な意識態度が、当時の俗っぽいロココ趣味の飾り物や不自然で上品ぶった社会に辟易し、善や美を求める人々の感覚に訴え、自然愛好へ導いたとされるものである。更に1732年、スイスの医師・自然科学者アルブレヒト・フォン・ハラーの詩『アルプスの山々』が刊行され、異常な反響を呼ぶ。この書は、山と谷の人々の自然で素朴な生活を描き、バロック時代の人為的な生活様式に疲れ何かを渴望する同時代人の満たされない願望を投影し、都会の価値と対照的な世界を示したため、読者の心の琴線と感受性に訴えたと見てよい。これから程なく、1739年、エンゲルベルクの僧侶がティトリス山に登ったが、英国の登山史家グリッブルは、この登山がアルプスにおける純粋なクライミングの始まりだとしている。1760年には、ジャン・ジャック・ルソーの小説『新エロイズ』——これはルソーの思想・直観・感受性を下敷に、大いなる創造力を持つ自然を発見する方法を人々に示したものであるといえる——が、崇高で美に満ちた自然に西欧社会の人々の目を開かせた。1760年、スイスの自然科学者、オーラス・ベネディクト・ド・ソシュールが、「モンブラン（4807m）の頂上を最初に極めた者及び登路を開拓した者には多額の賞金を与える」旨の掲示を山麓のシャモニーにて行なう。それまでシャモニーを訪れる旅行者は殆んどなく、そのわずかな訪問者

の大半は英国人だったが、この頃には人々の注目が高峰により喚起されるようになっていたと思われ、例としてシャモニーの猟師やジュネーブの画家などがモンブラン登山を試みている。1786年に至り、シャモニーの医師・山岳愛好家ミシェル・ガブリエル・パカールと水晶採りのジャック・バルマがモン・ブラン登頂に成功。近代登山初期の象徴的な登山であった。この後の約100年間で、アルプスの主だった高峰は登頂し尽くされていった。

1854年にアルフレッド・ウィルスによりヴェッターホルンが登頂されて以後、アルプスには英国人登山家が大量に訪れて活躍するようになり、山麓のガイドを雇用してスポーツ的な登山を展開した。彼らヴィクトリア朝時代に属する登山家達は、法律家・牧師・教師・科学者等、適当な資力と時間的余裕のある知的職業に従事する人々で、強靱な性格を持ち、考え方は貴族的であったとされる。1857年、世界初の登山団体『アルパイン・クラブ』（英国山岳会）がロンドンに結成され、「大胆さと確実」のスローガンの下に活動していったが、アーノルド・ラン卿による会員名簿の分析で、最初の281人の会員のうち、57人が法廷弁護士、23人が事務弁護士、34人が聖職者、15人が大学の学監、7人が学校教師、5人が科学者、4人が職業的作家、4人が画家、2人が建築家、2人が図書館員、1人が講師で、会員の大部分が中流階級または中流上層階級に属し、新会員のほとんどが都市出身者であったことが判っている。この会の設立は組織的登山の第一歩に繋がる意味を持った出来事であったし、欧州の他国もこの会に倣って、オーストリア、スイス、イタリア、ドイツ、フランスの順に山岳会を設立していった。

1865年、英国人ウィンパーにより、マッターホルンが初登攀されたとき、近代登山の黄金期は終焉を迎えたとされる。1866年以降は、アルプスに未踏峰がなくなったため、新たな未踏峰（の初登頂）を求めて、ヒマラヤ等海外への遠征登山が行なわれるようになる。また一方では、A. F. マンメリーの提唱する「より困難な登路による初登山」への方向も継承されていった。

以上を踏まえると、近代登山は次のように定義することができるであろう。

「原始より畏怖の対象であった西欧の山に、登山という目的で踏み入る行動が、18世紀に広く一般の人間によって行なわれるようになる。それは初期には科学的観測や実験を伴うことがあったが、次第に、純粹に登高行為を楽しむ行動として定着していった。それは、主としてスポーツ的な行動として現れ、近代アルピニ

ズム（近代登山）と呼ばれるものとなった。

この行動の現れを整理すると、人間の自然認識の型が原始的→宗教的→科学的という変化を辿ったのち、また科学者・文学者・思想家達が山岳の価値を認めたのち、市民革命後の近代市民社会において力を得た有識階層の市民によって行なわれた、人間自身の模索であり、物質文明の享受であったということになる。」

3. 近代山岳活動の文化・社会的基盤

近代登山の現実上の立脚点には、物的基盤・社会的基盤・思想的基盤があると考えられる。

1) 物的基盤

これは時期的には産業革命未明、内容的にはルネサンス以降の科学と機械革命の業績を指すものである。中世ルネサンス期の科学の延長にある、物質的知識の発達と機械革命とが、山岳活動に必要な装備類や交通手段を整え、その自由な行動を可能としていることを、産業革命に先立って働いた物的基盤と見なすことができよう。最初に、科学の発展を促した合理的思考と物質的知識の発達が、同時に、それまで迷信的・信仰的色彩を帯び敬遠されていた山岳地域を、先入観なしに見直す姿勢を生み、原始的な要素を拭い去っていった。このことは、機械論的自然観の確立として捉えられることが多いが、それが現実上に現れるにあたっては、このような合理的思考の賜である物的な生産物が、それを用いた活動を現実化するという過程を経ていると考える。

2) 社会的基盤

これは時期的には産業革命後、内容的には社会と経済の産物を指すものである。産業革命後の社会的・経済的状况の諸変化が、社会的基盤となった。この物的・社会的二種類の基盤の機能は、山岳活動においても区別して捉える必要があると考える。物的基盤に助けられた登山活動を実際に行うことができたのは、更に社会的・経済的基盤にも支えられ、物的基盤を享受する立場と経済力とを持つことのできた、有識階層を中心とする者達だったからである。社会的基盤のうち、まず社会的状況の変化は、近代市民社会の特徴である自由・権利・平等などの理念の実現によって、個人的な意志・動機に基づく山岳活動を可能にしている。一方、経済的状况の変化は、経済主義への移行に伴って社会におけるある実現力として確定していく経済力を有識階層に与え、彼らにその享受としての近代登山を実現せしめたと見ることができよう。

3) 思想的基盤

物的基盤・社会的基盤に加え、行為者の理念と価値

観の基盤となった近代の思想的要素の源流は、人文主義的なヒューマニズムと啓蒙の精神の二つにある。古代ギリシア思想では有機的自然観に到達していたが、この思想の機能はこの時代限りで終わるものではなく、後に、中世の人文主義者のギリシア的なものの価値評価へ影響し、山岳への迷妄を否定させ、山岳の探索を端緒につかせた。彼らの普遍的人間性重視は、ルソーにより継承され、自然の中で純粋状態に立ち帰り、自分自身の内なる善と美を感受するという視点として広まった。但し、ルソーは普遍的人間性の追求を自然本来の秩序の中にあるとき見出すことのできる自らの内の善と美として考え、人間が本来あるべき純粋な状態に立ち帰ったときのあり方を「自然」と見なしたのであり、現実の山などの事物は彼の言う「自然」ではなく、あくまでも帰郷のための舞台である。

人文主義的ヒューマニズムが普遍的人間性追求の観点から山岳と結び付いたのに対し、啓蒙主義思想の生んだ——あるいは明確に価値を与えた——自由・平等の理念は、自由意志に基づく行動と達成を可能としたこと、そして山岳活動の物的・社会的基盤をなす近代社会を実現したことによって山岳活動と結び付いた。啓蒙の精神とされる合理主義と個人主義は、その産物である、個人が自由意志に基づいて任意の行動をすることのできる権利を近代市民社会において実現し、山岳活動の前提である行動の自由の基礎を作り、また、啓蒙思想の重視した理性は、近代社会の骨格となって前述の物的・社会的基盤を構築した。

山岳を中心とする自然観の形成は、こうした物的基盤・社会的基盤・思想的基盤を享受した、英国を中心とする近代の有識階層により行なわれた。近代市民社会の新たな担い手であった彼らは、社会の物的基盤と社会的基盤を基に、装備を整え、遠いアルプスへ移動し、ガイドを雇用して、近代登山を進めていった。この時代の彼らの共通認識として、①キリスト教義を背景とした sport の理解——機械文明に頼った都市生活によって脆弱化しないように身体鍛錬を行なうことは神の義に適うことであった、従って登山はキリスト教義を前提として高い価値を持つものであった——、②運動競技による人格形成論により、sport 専門組織やルールが整備され、試合結果を記録として数量化して比較し、たえずその更新を目指す風潮の登山への適用、③風景美を自然に見出す美学的態度 等の前提があったことが判っている。彼らはこうした価値観の下、前出諸基盤を用いて、山岳に対する態度の直接的形成者となったが、その行動態度は、啓蒙主義に基づく創造

ではなく、啓蒙の精神が生んだ社会の産物の享受に終始した。

4. 精神的諸要素

山岳への動機の深層には、次のような要素も存在していると考えられる。

1) 観念——美・崇高——

人間が自然と正対したときに生じる根源的な感情・観念として、哲学者の研究からは、美と崇高という二つの要素に関する観念が指摘されている。例えば、カントは、自然に関わる美と崇高の観念を考察することによって、人間の自然に対する、大きな威圧・危険を崇高なものにまで高める判断力という認識能力の働きを指摘し、それは心の感受性と人倫の理念、更には魂の発達に基づくものであったと分析している（彼は前出のソシュールのアルプス登山も例に挙げて分析を行った）。

近代の山岳で行動した人間の記録からは、彼の持つ自然の崇高の意識は、自然の事物自体から直接的に喚起される段階よりもやはり一步踏み込んでいたことが判る。崇高は、自然の事物自体には存在せず、自己の内奥という始点と共にあったのだが、このことは同時に、近代登山の行動が自然という現実から遊離した一面を持っていること、その行動は自己の精神を投影したある象徴性を有することを意味するものであろう。

2) 感情——神話・信仰的畏敬——

人間の山に対する感情の原型は、基本的には畏怖に基づいて、一方では恐怖を、一方では神の創った世界の壮大さ・素晴らしさを感じる両面を持っていたと考えられる。世界各地の神話を比較すると、高山がない地域では、山を神の起源と考えるような神話は残されていないように、自然が最初に人間の精神の深層における地位を得た際には、地理的条件やそれを判断する人間の視覚的認識に左右されるところが大きかったことが窺える。

従って、西欧の、自然の中に巨大な山地を有する環境から発生した、山岳を中心とする自然に対する畏怖と驚異の念が近代に至って変化し辿りついたところの自然意識は、地理的な必然に帰せられる固有性を持ったものであったと見ることができる。この西欧的な自然意識は、マックス・ウェーバーのいう近代の「脱・呪術」化まで続き、結果として、世界を主導する文明の拠って立つ自然観の底流を流れている。

3) 近代スポーツ的要素——競争と達成の観念——

近代の山岳における活動が、近代登山というスポーツ性を持つ形態をとったことで、そこに競争や達成と

いう、近代スポーツと共通の観念が含まれる。この現象は、近代、自然とこの種の趣味・意志的活動が接点を持ったことを示し、またそうしたスポーツ的な意志が自然への態度の動機となり得るようになったという、自然を捉える心情的な大枠の変容を告げている。

近代スポーツの本質的動機が何に集約できるのか、という研究で注目されるのは、レンクが重視する、特にドイツ語圏のスポーツ科学において扱われる「達成 (Leistung)」の概念である。ハーグも、達成概念がスポーツにおける人間を数値に換算される存在を超えたものとして考察する契機になりうると考える。この達成概念は、「西洋の近代を推し進める原動力となってきた達成概念」とは異なるものであり、結果よりも行為がより重要な創造性のある芸術的、科学的、或いはまたスポーツ活動のごとき疎外されていない活動において、達成における喜びを伴うことが条件とされる。また、この達成を重視する根拠は、自己実現と自己理解の肯定にあり、それがスポーツに求められる理由は、スポーツにおける独自の固有な達成が個性の創造的表現であると考えることができ、故に自由意志に基づく行為を達成の前提条件とみる。

レンクらがスポーツの深層の問題として整理した、自由意志に基づく達成による自己実現と理解は、近代スポーツとしての登山にも、その動機の一角として存在するものであった。このことは、構造としては、なぜ近代の山では自然に自己が持ちこまれているか、その橋渡しの一つの根拠であり得るだろう。

4) 内的真実・普遍性の投影

近代、人間の自己と理知への理解・重視が進んだことを念頭に置くとき、その変容の後で顕わになってきた、もう一つの深層の存在がある。近代の山岳活動の真価を考えると、都市社会に属する登山家達が、各々の時代の最高の文明を享受した上で猶も山岳へと向かう動機には、普遍性への志向に近いものがあつた。登山家達の手記から読み取れる要素には、ある永遠的なものを感知できる瞬間の訪れや、人間にとって重要であつた筈の何らかの起点への回帰の場としての山、そして自然や世界と真に協調するためのものとしての創造的行為を模索するという意識等がある。彼らの行動が人間の根源的なものと文明の最高到達点での融合という極めて現代的な問題を統合したものであるが故に、内的深化のプロセスを前提として、登山における永遠性の瞥見ということが起こり得たと考えられよう。人が、存在の完全性を自分のものにできるときを、如何なる形でか持ち得るといふような実感こそ、近代人の自己が自然を通して見ることでできた最も大きな秘密

であつたのかもしれない。

この高次の永遠性・普遍性の希求が、美・崇高、畏怖・驚異、競争・達成といった根底の精神的要素と共に、近代の自然に向かう意識の中に存在したと言え、それは近代の自己の自覚化に基づくものであると捉えることもできるだろう。

5. 山岳を中心にみる近代の自然観の形成過程

前項までに触れてきた個別の要素は、次のように整理することができるだろう。

自然への価値観としては中世の人文主義者の普遍的人間性追求を源流とし——それは古代ギリシアの有機的自然観を否定して生じたものではなかった——、そのヒューマニズム的な姿勢が、ルソーの「自然本来の秩序の中にあるとき自らの内の善と美を見出し得る」という思想の流布により、自然の中に理想を見出し、理想を投影する考え方として広く取り入れられたものが原型である。また、山岳への態度は、近代登山を実行した英国有識階層の意識・価値観——例えば、キリスト教義の新たな解釈——とそれに基づく具体的な行動を中心として展開された。それらの背景に、近代市民社会の自由な行動・権利・物的基盤・社会的基盤等を可能とした思想としての啓蒙の精神が存在する。

更に、西欧の自然観全体の深層として、西欧と米国の状況を比較することから、次のような問題を指摘することができる。

近代の同時期の米国で、西欧と異なり、山岳が特に重要なものとして関与してくることはない。米国では、先住民族を追いたてながら、森林伐採・埋め立て・灌漑等の方法で広大な土地を切り開き自然破壊を行ない続けてきた。が、自然に対する正しい科学的知識の浸透に伴って自然への意識も徐々に変化し、19世紀には詩人・思想家エマーソンが自然と人間と神は一体であることを述べ、また思想家ソローも森林生活での体験を記している。自然への評価が高まったことは同時代の西欧と同じであっても、米国における自然とは平地的なものであり、森や日常的範囲の中にあるものであり、この大陸には全く別種の自然観が形成された。彼らの自然を巡る思想の特徴は、自然科学的調査に基づく正確な自然理解、人権思想にみる倫理意識とも類似性を持つ自然保護思想、19世紀風景美学の影響等の点である。

米国が、自然観における山岳観念の比重の点で西欧と大きく異なる理由は、山岳を中心とする自然に対する原始的畏怖を源流に持っていた西欧の自然観とは異なった形成事情に拠ったからであると思われる——米

国へ移民した者たちの自然観は、その土地の先住民族であったネイティブ・アメリカンの自然観とも切り離された別個のものであった——。原始的な畏怖を伴った自然観を持っていたり、神話的な自然把握の経験を持っていたりした国の場合は、文化の近代化に伴いその畏怖や迷信の克服が行なわれると思われ、それが自然への挑戦という明瞭な形として現れたものが、西欧における近代登山であったのではないだろうか——そしてそのとき、山岳は、自然が神の座から引き降ろされる通過点に位置したのではないだろうか——。山は、乗り越えるべき近代以前のものを象徴させられることによって、近代の自然意識の変換点に関わるものとなった。このことは、人間の側から捉えれば、自我が神話的な世界構造を迷妄と捉えてそこから脱却する変化であり、自我を解放し、意志と理性の力を自覚するに至った大きな業績でもあった——その自我はついに、存在の完全性を瞥見し得たとさえ感じているのだから。

よって、西欧においてこの近代登山が行なわれた時期は、この一時期に限ってあたかも「自然＝（ほぼイコール）高峰」であるかのような状態であったにもかかわらず、山岳観がそのときの自然観と等質であったわけではなかった。自然観の一つの質的变化が存在する地点に、それを物語る、山岳を巡る事象が現れたと考えられるのである。

結び

当該分野の社会構造的な問題点として、使役・雇用関係にみられる階層性に触れたい。

近代、それまでに山に入らなかった有識階層が登山を行なった際、その経済力を用いて、山を生活の場としていた現地の人間をガイドとして雇用して行なった。初登頂も、実際の登路を切り拓かされたのは、常に、登山という目的のために雇用された現地の生活者だったのである。日本においても、近代登山導入の初期の登山は現地の山案内人を雇って、登山という趣味を享受できる者が行なうものであった。この関係が定着したことによって、近代登山は階層関係を内包する形で展開するようになった。

この雇用する側の有識階層を仮に「A」と呼び、使役されて A の意向を実際に自然に対して行なう側を「B」と呼ぶ。近代以前の人間の自然への直接的行為は、B が生活目的で山に入り行なうだけのものであった。それが近代以降は、人間が自然に最も近い地点において自然への働きかけを行なう人間は依然として B であるものの、その実体は A の傀儡であり、A の意思・目的に使役され、A の論理で行為しているにすぎない。この

A・B の構図は、今日に至るまで自然や山岳に関わる商業活動の基本的な構図となっている。今日それは地理的範囲を大幅に広げ、現地生活者 B の土地の自然破壊には、A と A の論理による需要がある。従ってこのような場面では B の持っていた自然観は沈黙し、A の自然観が支配している。または、自然観が A・B の階層性を含んで機能しているとも言えるだろう。A は、啓蒙主義思想に由来するものであり、また、ルソー等に立脚して自然に踏み込みながらも、自主的な創造でなく、啓蒙主義の産物を享受することに終わってしまっている。

自然が近代の自我の発展追求という目的の遂行上、間接的対象として享受・搾取されたことは、関連各分野の発展のプロセス上からは相応の理由を有するものであった。しかし、我々はいまだに自らを取り巻く環境として、狭い範囲の外界・客体としての自然しか捉えてはいない。

上記の A が敷設した自然へのルートを継承拡大していつている我々は、A の本来の意味の取り違えに基づく自然への動機や、そのような価値観が創造しうるものの限界を認識し、また A 的価値体系が B の機能を持つものを使役して自然環境を破壊させ、継続させている状況を是正して、各々の分野や立場が築いてきた自然への異なる認識や価値観を統合し、今日なおも真であり永遠である自然とは何なのかを理解し直さなければならない。

そして、我々の内なる真理と意味根拠に対して真のありかたとなるような高次の働きかけを、自らの精神の投影物たる自然に対して行っていかなければならないであろう。

近代の人間の自然に対する夥しい概念と価値の付与は、人間が自然に精神をどれほど深く委託しようとしているのかをも示すものである。我々は、今日なお根底的な真理であり続けるような自然とは何なのかということを理解し直し、保ち続けて行くべきであろう。

※「2. 西欧における山岳の概略」項の記述にあたっては、下記文献を参照した。

- ・朝日新聞社編『朝日講座 探検と冒険 2』東京、朝日新聞社、1972 年
- ・ミシェル・ヴォシェ著、近藤等訳『ヴァリス・アルプス』東京、山と溪谷社、1980 年
- ・川崎隆章・近藤等編『山岳講座 第 1 巻』東京、白水社、1954 年
- ・川崎隆章・近藤等編『山岳講座 第 2 巻』東京、白水社、1954 年
- ・南條初五郎編『山岳講座 第二巻』東京、共立社、

1935 年

- ・アルベルト・バウムガルトナー、ハンス・ビーベルリーター、ノーマン・ディーレンファース、エルヴィン・グレンツバッハ、ハンス・ハイエルリ、トニー・ヒーベラー、ギュンター・シュヴァイツァー著、西堀栄三郎、宮下啓三日本語版監修『図説百科 山岳の世界』東京、大修館書店、1981 年
- ・エリック・ニュービー著、近藤信行訳『世界登攀史 一偉大な登頂とその試みー』東京、草思社、1981 年
- ・向坊隆ほか『東京大学公開講座 32・山』東京、財団法人東京大学出版会、1981 年
- ・ダグ・スコット著、岡本信義訳『ビッグ・ウォール・クライミングーその歴史・技術・用具』東京、山と溪谷社、1977 年
- ・樋口敬二他『ひとはなぜ自然を求めるのか』所収「未知なる自然を求めてー限りなき好奇心」東京、三田出版会、1995 年
- ・ハンス・グロッセン著、近藤等訳『ベルナー・オーバーラント』東京、山と溪谷社、1983 年
- ・ジュール・ミシュレ著、大野一道訳『山』東京、藤原書店、1997 年（1868 年著）
- ・エドワード・パイアット著、山崎安治、岡沢祐吉訳『山と登山』東京、講談社、1983 年
- ・三田博雄『山の思想史』東京、岩波書店、1973 年